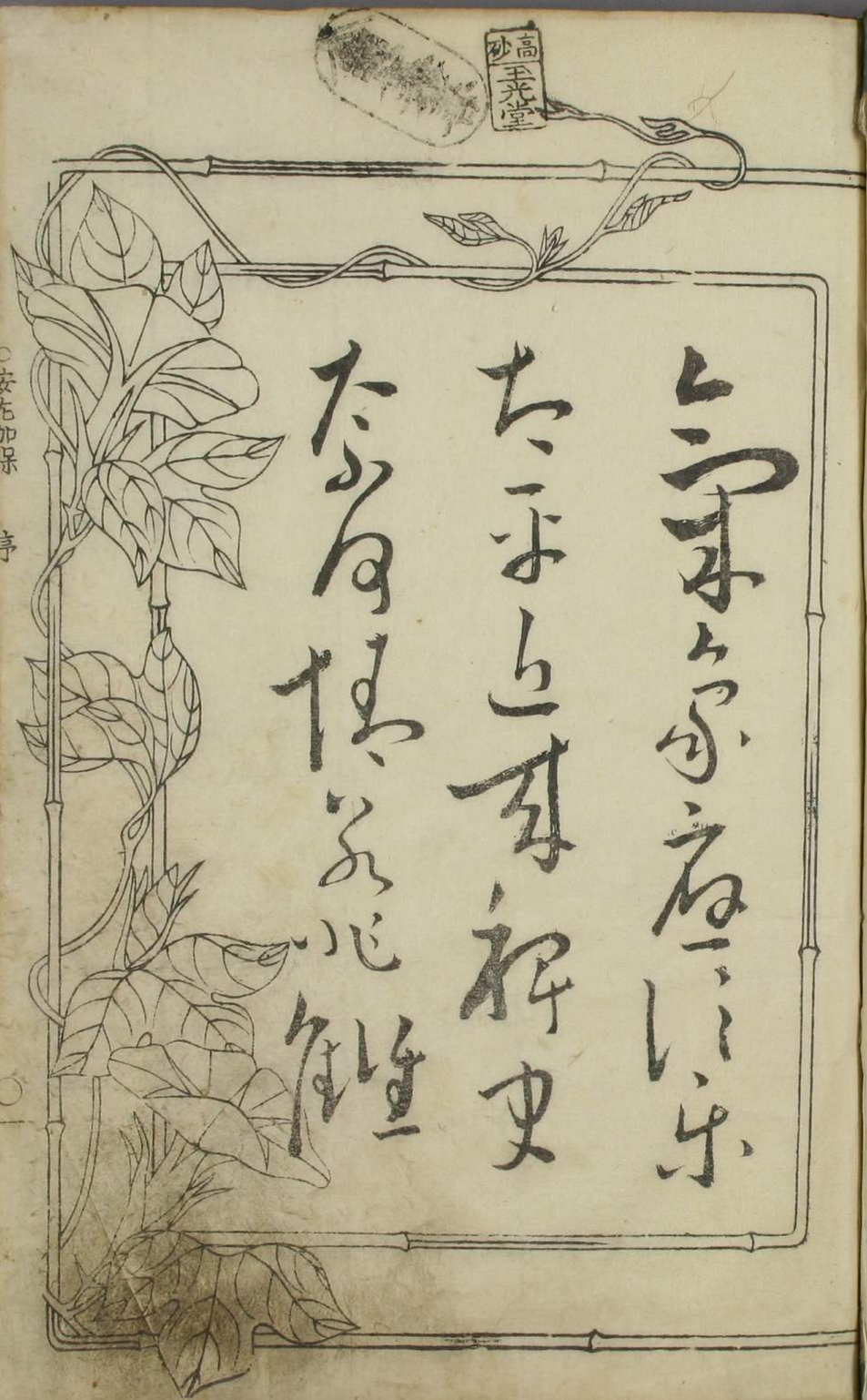
# 新宋紀日記

後篇

特別
へ13
4268
6

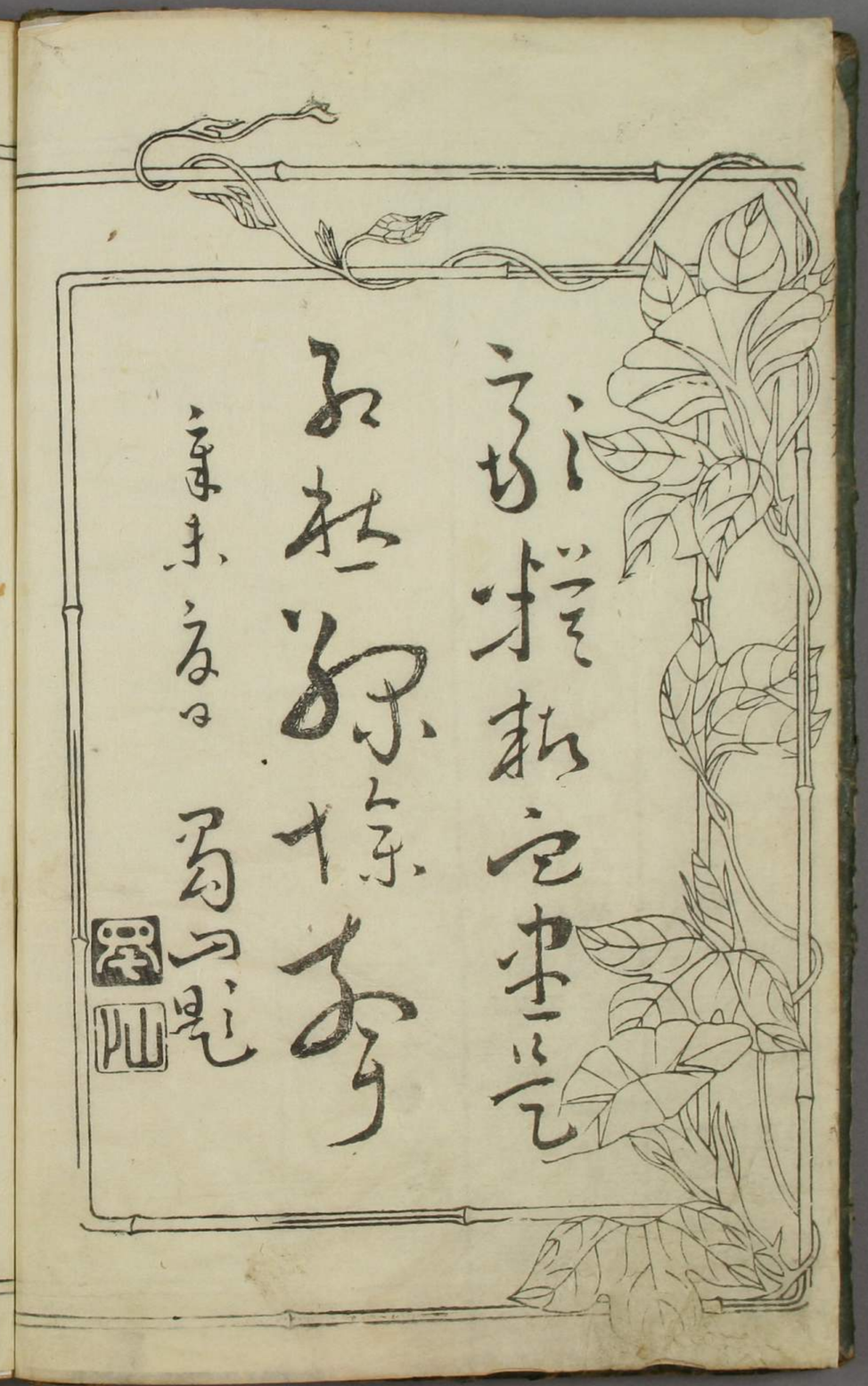
高砂
玉光堂






A13
4268
6
91-2161

弱蔵内
倚雍菴


新定東雲
東未亥なる
蜀山

佐伯一清


德壽妻阿茂
木綿屋治壽

大意

前編五冊は、往古宮城阿蘇次郎春雄なるもの、産出るよう成長るにけて、有趣話柄どもありて。春雄一年宇治の螢狩まうう、偶秋月方之助と嬢深雪らと佳人と奇遇其後明石の浦に夜泊して、不料まこと那の深雪に環會らるゝ。ちうるき花風出来。私と私との東西に別を去。両世良縁に隔たるまでを載す。

後編五冊は、阿蘇次郎故ありて駒沢次郎左衛門と称り。其君大内介殿之諫を東へ下るうれしより種々の傳奇ありてめざゝしく義勇非常の勲を樹て義忠の名、海宇に顯はす。又深雪も貞節の為にそとばくの艱苦を志のびたゝ遂にめでたく性郎春雄と偕老の好逑成ます。結局

狗浪志るす



故

# 新刻


| | | |
|---|---|---|
| 芝屋 | 芝叟 | 永 |
| 花魁 | 雉子 | 錦木 |
| 鴛鴦 | 拍毬 | 朝顔 |
| 捏 | 瓢 | 賊 |
| 櫛 | 禿 | |
| 梵字 | 太刀 | 昆布 |
| 狗 | 雲 | 浪 |
| 楠 | 燕 | 水 |


朝ごふの後既刊の近く刷て寄

## 話柄扇名家

無逸　巴隲　延命　西谷　都夕　呆子　一夢
白堂子　其光　鹽谷嘉　泉鴻　潤風齋　吉田　廣谷
久池五　鮮亭（京）　三團　岡吉　葛籠治　莊田　佐佶
大平　安河内　綿鉄（下寺）　一鳳　堂加林　引鶴　桃里
可櫻（粉川）　三笑　平岩　扳道　直任　久木本　呂蛤（京）
橘屋（京）　歌友（京馬尺政）　加木（伊勢）　幕屋（名古屋）

# 朝顔日記卷之四　故芝叟遺話

柳浪　著

## 九回　躍

花は百日の好きく、人は百歳の壽れ〳〵といへるハ宜哉大内殿の儒臣駒澤了菴老病にうけて、やも危特ふせまと けをび。親屬に枕方は集合てゝやう。我薄命よりて實子祥乙が行跡よりらぬに見きて、長く勘當ゐれまびてそのゆくえに志らず。ふまき各志らるゝと好ゝ了菴不肖ねとといへども。形のごとく秩禄といたき、二代の君は仕て、輕からぬ恩命とかゝふて、剩中老の席をき汚しつゝそもそう政事加談の職とゝい。戰場ゝてハ軍師の

指揮をうたとく。治世の掘密に泰判ねすふとして。富家ふふいてハ。古来よりとき一個ふかごと。比なき重職なり。ゆくる箕裘を襲んぞもの。姪児阿蘓次郎ねらて外よ。ときと渠もと青雲の志あて。親衛を望む嗚呼の漢ねれべ、とが跡式に譲らんとしても。ねてうたやをく承引べき、ところふよりとも死たとも。全然病重しといつるて。急ぎ都よて呼ぐし。ふの遺書を眎。各餘儀なく勸解相續せさせたまハてまい。今しも目に瞑ぐとも。いさ〳〵うㅂ感ハのたらじと。叮嚀よ咐囑しゅ。程もあらを無常の風にさそハきて。あハを敢果かく黄泉の旅よおもむきける。去程よ宮城阿蘓次郎ハ。去ぬるゆふべ。暴雨よ沮らきて。はた敢く明石の浦よ船泊せしゅ夜ふけ人静まて。月いとよくてをたると愛てあてしゅ。偶と隣船なる琴のこゑを仄きしゅ。こゑらずも。秋月弓之助が女子深雪と環會。深雪が貞操のせちなる情よ絆さを。直よ仕を遁とせしをうら。ゆくてをねくも。深雪が船俄よ蓬に拽わけて。馳出せしゆへ。たちまちまて西東とうき別をしてゆみなく都よのぼて仕き。故の下河原よ僑居たをども。肚裏ハその人を忘るくひまねく。猛き武士といへども。戀よいもいよハるふらひ。仕ねよたで快々として樂しまず。浩処ふ周防の山口より。火急の消息して。伯父了菴重き病よ伏し。息あるうちふ。入べきふとあり。瓦時もてやく下来へしと。

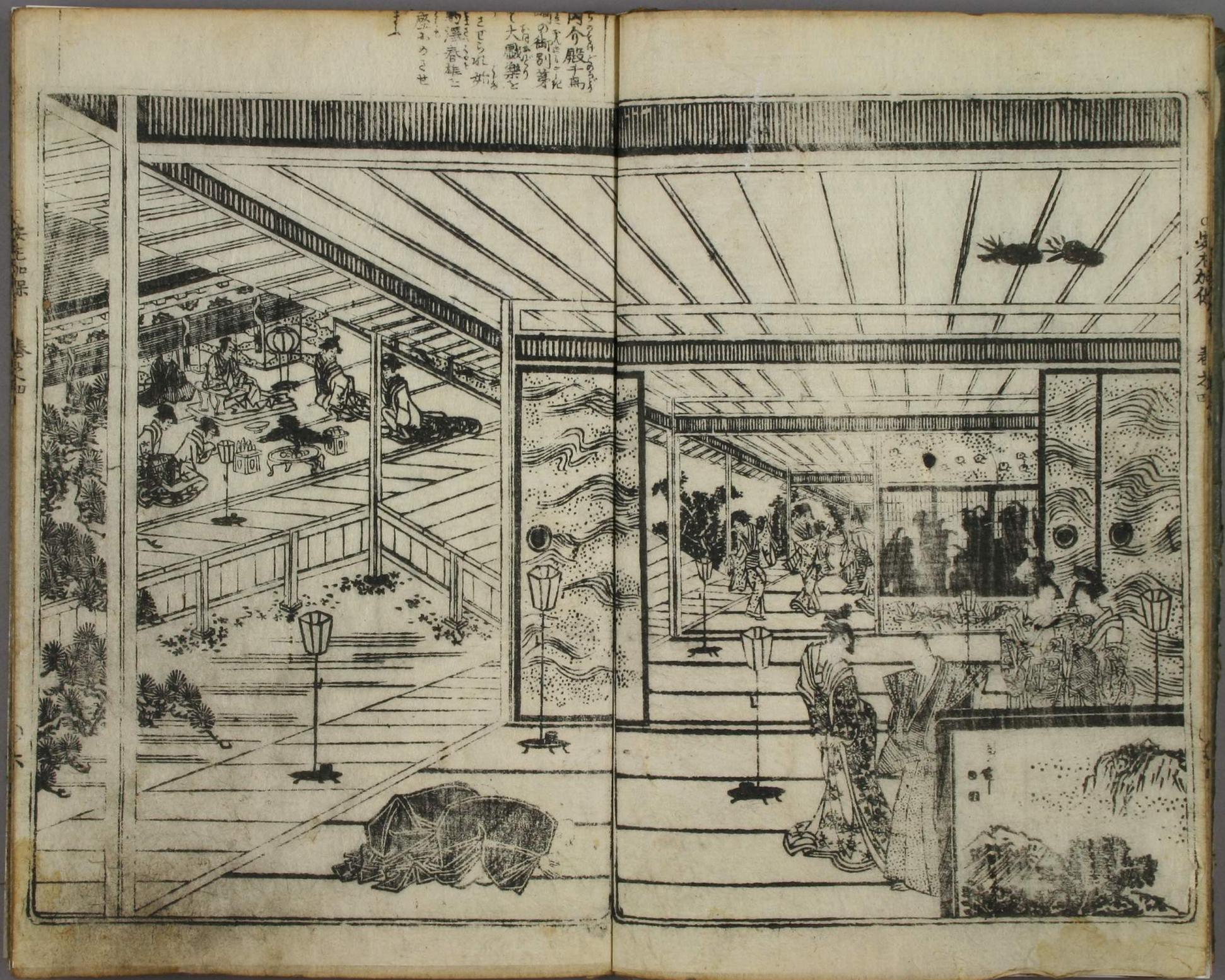
いいおこせたりけきバ、阿蘓次郎ハ又しも席ゑ煖むるに
いとまなく、恩ある伯父のもとゑ行きべいと氣はいはしく思ひ
取るものもとりあへず、その日のうちふ起行して、且暮途
ゑいそぎて、ゆけハ程なく山口ゑ入る。駒澤ゞ邸ゑいたるぬ。
親屬眷族ぞちまうけて阿蘓次郎ゑ對ひ、家主ゞ庵
くや仙去たる、故翁臨終ゑ寫めらるたる一書あり。和主ふ
遺與くるとの、遺言ゑ告ける。阿蘓次郎聞もあへず、
双眼涙ゑうちうるゑ、忙しく遺書ゑ披覽をバ、ゞ庵代こ
主恩をかさね、奠大の登庸ゑ遇て、かくる重職を蒙りぬ。
さきども何一個寸功とも建をして今徒ゑ席の上ゑ終
ぬきバ、おきのゑ遺る恨るゑ、おいを海曲て、おの家督と嗣き、
ときゑ取ゑ代ゑて、國のためゑ家の為ゑ精忠ゑ盡しくまと
よと、ふろへる手ゑて、いとこまぐくと書たるふゑ。阿蘓次郎も
ほとゞ悲嘆をおし、義理ある伯父の死後の托さても餘
義もれきおとどもかゑ、己ゞ宿志ゑ遂んとて、強て推辭い
道おらじと、心ゑ決して允諾けきバ、人々擧ゑて悅こび
けり。やゞて一通の願書ゑ、ゞ卷病危きふよゑ、姪宮城阿
蘓次郎ゑ、急養子ふおしたき趣ゑ、たくめ、親類の何某、
おきを月番の家老ゑさゝ出し、その執成をたのみける
ふ。おの由家老衆より、上聞ゑ達せらるゝべ、事故ふく、御
聽をきゑて、家督相違ふく御沙汰をぬ。阿蘓次郎ハ
おきゑゞ庵ゞ家を繼、姓名ゑあらたゑて、駒澤次郎左衛門

と称しけゝ。いまゞ中老職とい。仰せ出さるゝねど。先親のおとく政事加談役なゝぞ。おさをける。おを全く次郎左衛門年弱けをとも。才學世に勝を。くゝその性の温厚の聞あるゝよををとそ。やがて次郎左衛門い。父が喪式祭祀ふゞ。形のおとくとをおこふひ。七七の忌ゝはてゝけをべ。日おとふ築山の館に出仕ゝ。孝心をゞくげをけゝ。次郎左衛門。養父了菴が遺言をゞ心骨ふ浹てゝを守を。まさゝ君の御大事ゝハ。命が塵芥よをも軽ド。無二の誠忠と盡さんと。准備ゝゞ奇特ゝる。もとよをゝの次郎左衛門。加談役のおとるをゞ。平生家老衆より政務のおとと談せらるゝふ。職分のことゝゝ

よゞ一くゝれを辨論をろふ。その判断をるゝゝ明白ゝて緊く道理ゝもるひ。まゝ人ゝをくをたる卓識をゝを。あをけるもゝ。家光の面々大ゝ我をを。其ゝ養父了庵ゝも出盡て。當世無双の壯佼。後来い國器ゝもたつべたものをを。いと頼母ゝくゝそれもひける。をゝも次郎左衛門ハ。いゝ謙遜。いゝゝるも唐突たるおとゝ為をねば。人の眼穢ゝもたくざをけて。かゝて許多の月日を過ける後。當主大内介多々良滿興朝臣ハ。往歳衆望ゝて。鎌倉ゝ在せゝ。當時新大磯の柳巷第一の花。松菜樓の瀬川とゝふもの。艶色ゝまどひ。晝夜酒色ゝの荒ませたまひ。警中の御動も懈がちふるふぞ。誠忠の近

臣どもかいろ〳〵諫言奉てけるふ、そのたびおしてゑ總て
御手討ゑねさせらゑ、おとしもわら〳〵ゑと御所行のゑ
多かてを、おのことゑ反うゑ幕府ゑ聞へしふや。ある時
管領上杉殿よて、大内家の長臣、冷泉帶刀といふ者を
召ゑ、蒲興殿放蕩のきこへあて。事あらさまおふらざ
らうち、再應諫て行ひを改めらるゑば。珍重ゑて、倘も其
事募ちふおわて、數代聯綿とる家國ゑハ換らきまじ。
早く儲君を願いて介殿をハ押籠とさて志ろべしと。御
内意ゑ仰ゑとさゑぬ。冷泉帶刀、しゑを承たまハて
退出しが。周章をるゑとおはるゑふらず。いそぎ本國ゑ急
書ゑ下し。管領より志う〳〵の御内意あり、事遲々及び

ねバ。臍を噛の悔わらん。いち早く評定ゑまよハるべし
との文言ふて。かくてゑの早打。寸刻ゑ爭そひ馳つゑ
けるふぞ。當家の一族山岡玄番允を始とし、家老中列
坐ゑて、ゑの急書と披見るゑ〳〵各色ゑうしまひ。ハい由
由しゑ大事ねて、志うゑが大評定をるすべしと。忙ハ
志く一藩中ゑ令下て、騎以上のものども一人もの洩
らず、惣出仕とふさしゑ、大書院ゑハ、山岡殿と上坐と
歴々の衆。綺羅星のごとく並居たて。藩士の面々格式ゑ
照ゑひて坐を占、さしゑもの廣間ゑも居あまて。間ぎし據
側まで。人ふらぬ所もるし、大内家の大身るゑこと是
ふても志るべし、月番の家老相良主馬。滿坐を見ゑ


内侍殿千鳥
の御別尊
し大戯樂と
春雄と

帯刀が来書の趣を披露せ。御家の安危まの時なり。たとひ小禄の衆たりとも。御上の為に忠義を重じ、おのゝ所あるべし。憚なく申見らるべしとぞ叙よる衆人こを伝聞よて。一同よいつと平伏せしが。ほをまで諫言せしものども。盡く御手討に遇しと聞怖たぶ眉うちひそめ。議合のをよて黙々として一言も發をるものなし。まさ重職の人々詮議區々ふてといへども。いづれ今一應も。諫言を奉るふ志らど、とゝようふふ。させる良策もあらざるを。まづその日の詳定いさづらおゝ〳〵ど見えふける。かくて三日四日があいだ。うちほぎき例のおとく。藩中惣出仕をふしけをども。家老衆とは

いゝ。異なる一語を出をものはわらざりけて。駒澤次郎左衛門はさが弱年の分なれ省を。さたりて影の歪きの中にハ。何とういひ出る人もあらめと。頓口無言てひうえ居たて一一ぐいまど評議さだまらど。かくいたづらふ日數のたらもくおとと。もどかしくおもひ。さの時列を出て云やう。不肖の僕歴々の御前を憚らず。さし出がましくいへも。當家危急存亡の秋にあたて。鄙衆あるを申見ざるハ不忠なるべし。殿さをかて放蕩よ在ますとも。そこよて聰明なる御性なをべ。ひとをら臣たるもの誠を盡いづくまでも。諫申をふ志くいわちに。僕おり。仔細の侍て。諫言言上やうの手段あをべ。あいを御ゆるさ

をとかうふ。いそぎ鎌府へまかり下り給へ。おそらく仕課ざるべしとハいはまじと、言葉巧放つてまうしけり。山岡玄蕃允ハ胸に一物あつて、かく殿の不行跡ハ沙汰と聞よ。謀成もつとも。ゆゑ〳〵肚裏に慌と生じ。己が嫡子成。儲君に立まくれるゆへ今もし駒澤ゞ異見を用ひて厩成鎌倉へ下りまゞ。極もとが大望の妨なるべし。そらさぬ黄腸成おし。駒澤が語をきて殿へ直に諫言しの心得ゞ。おもまで諫し者を手討あてしハ。幾個しかをきゝず。今まさ諫んとせバいとゞらに激怒とはじ。損あて益からん。十全の奇計もあらずして、古老の人をバ閣とき。和主が分際ゆて。諫



手かゞい傷痛しいうえのさとさゝゆもとべ。次郎左衛門うちかしまま。仰ことく僕おとき。その仕ゆあたらずといへゞし。今度家督の御礼と稱し。君邉へ近つれさへいたしるへ。施をべき一術のてべるからゆ。あまゞちふ僕へおの役仰つけらをうしと。丹誠面ゆあらハれておそうゆ申請けをべ。相良主馬おをゆ同し。駒澤氏ゞ恩慮あるこゝハ。各もおらるゝとを形。まをバその望ゆまもせ。おをと下向かさしむとも。萬ゆ一失もさうらうまじ。主馬が腹ゆ代てうけあひ申。各おをゆ狀せらるべしゝつ。おを成さいて同列あへて拒むものふく。異口同音ゆおの議至極よろしかるべしと。諾ふひけるふゞ。

玄蕃允もせんをべれく。多分の衆議より悖りもたく。濫
觴承引て評論頻りさまをぬ。おもふよりも相良主馬
ハ忙しく。同僚連書の返簡ゑ志たくか。使を馳て。此由と
在鎌倉の同僚冷泉帯刀うとへいひやりける。ちの時
まもく。山岡玄蕃允もてが企叛の荷擔人岩代瀑布太
といふものよ密書と下しぬさるほどに大内殿の在せる
亀が谷の上第よい。ちさひ駒澤何某とくもの殿へ諫爭
の為とて。近々下向せるよしそ風聞かしうまし。近従の
人々いちしやく。ちのよし弘殿へ言上ふけるバ。暴姓烈火
のごとき大内殿。近従の語をくもあへず。勃然としくるひ
怒らせたまひ。什麼の次郎左衛門とやらん。ふまぬうて



たる小冶郎ち。予よ向つて異見まどくい奇怪のいきうとし
一言よても傷觸ゑ申さバ。なぐ一刀よ討放しくきんと。息
まき高く罵たまへ。近従頭岩代瀑布太御前よむうひ。
傳へ承いる。かの次郎左衛門と申ものハ。ふまけしかちぬ
白書ゑ星と。もしも御目前よちうぼけたまいつ。いうゑる
稽事とう仕出し。ちよゑき御恥辱をうけさせたまいん。
さおらバ。ひとをとを星の御手討ちとふていよも御憤氣いとを
させたまいど。ちうど渠奏看していうほど拜謁ゑ願ふとも。
絶て御値ふうらんよいと。ひそうよ山岡ういひ来したる密書
ふよ星ちくゑん詞をユよして讒言とを撰へけゑ。大内殿い
天のかせる英雄とよバを。きいうて怜悧御性るをども。古来

よこ名将も色ふハ惑たまならひ、況て麹孽てふものゝ精神を狂ハしたてまつる。弁才まと諫を拒ふ足、總ての人を蠅虫ともおほしろさねバ、今かく暴布太が激發るとうゝし。いろさま汝が申をおとく、次郎左衛門の匹夫下郎見もおろゝ眼の汚。汝等きゝるべく計へと御をふゞ瀑布太かどゝ笑とるし。仕をましたてといさゝける。日あらず駒澤次郎左衛門鎌倉ふくだて、由居が濱の御中屋敷ゝ落つゝ。家老令泉帯刀ゝ對面をかし、よろづ示しあいずことゞを あてて。直ゝ執謁とぞねがひける。殿ゝい岩代瀑布太等が讒ゝ信ど、一度も召るゝ拒けをバ、さしもの次郎左衛門もせんをべるく、今日明日と晩て、いたぢらゝ一月

ぢうを過しけて。帯刀ふゝくまゝと愁ひ、ひそかゝ次郎左衛門ゝ招きていろゞせんと商議をるせバ。次郎左衛門てふやう。さあらハ御近従ゝたよて。如此くくはゝらひたまへと。さゝやきける。帯刀ゝ此聞てふもゞゞとぶふゝ合へてて。そのゝたゞまる殿の内執事。湯浅勘兵衛ゝ呼よせ、次郎左衛門が申せしゝを口頭ゝ吩咐けまべ。勘兵衛心を得て、詰且御前ゝ出小臣前日狂ゞる巷説ゝ承ハてつ。そい先頃君を諫奉らんと。廣言ゝ放てまゝ下にる。駒澤次郎左工門度々執謁ゝ願へども。今ゝたいて御値るきハ。君全く渠が鋭氣を嚇をたまゝ由ゝてと。彼所此所ゝて流言

弥生の頃、新
大阪の街頭
ふ。幾百株の
櫻花と植
らぐ吉野山
瀬よも勝りて
春色薫く
爛漫うち集
合戰の花時
き對酌と取し
人間の歡樂
と極六繁華
いさぎようふし
大門口

瀬

もの〳〵しく、相公の御勇氣よりも似げなく燕雀よりも
き一個の駒澤縱令緩怠なるこゝ申出すとも。只御一
句の下よりひふせたまへべし。さらしきまゝ煩擾ふふぼ
さるゝば。御目ろくさるくやいる、一言もいこせとゞず。威嚴
を示し。即坐に追黜たまへとき。渠もといふなる巧
宿搆居とも。支度たちまち相違して。鼠のごとく逃去る
侍らん。さあらばいたづら心地よくこべらんと。語の裏
に孤勢を含。迂遠しふ激ましたてまつりけるハ。大内
殿はく〳〵聞召さいふさま本府よりて。家隷も多きる中
ふ。渠一人抽んでゝ。おとさらいまゞ弱冠の身として。予ふ諫
言ゆゑ。さんとハ。さて〳〵斗膽奴なる。さらずいまゝ世間
をもちぬ井の蛙。向ふそゞの奴才め。必竟武邊の大体
をもときまへねバ、大國の主ゞ逸遊を驕奢のおとく
心得たらん。好〳〵渠を呼出し。女どもふ大戲樂させ
て肝を潰させ。場羞とさせて弄東西ふ恥しくまくこ
進臣に命らまし。やく准備をいそゞせたまへ。おも
ふよりて奥女中三十人。生藝者三十人。熟藝者
三十人併せて九十人の美女ゆをゞり。いとゝやびやう
ある一樣の衣裳をさせて。千鳥ゞ崎なる御別荘にた
いて。大戲樂をぞ催さる。こやその日ふもふをけまた
無よい花燈を點し羅ね。椽側よハ。猩〻緋と緑羅紗
を二條に布こたし。梨園の子弟ハ。片側に並び居て。

吹彈よ妙ゑにくさしむ。殿よりかの駒澤次郎左衛門と黎明よりて召よせて。小書院よりひろへさせ。やもふべよちづきて。戲樂ゑにぐりさせらるを。さて九十人の戲児ども。總て嬌艶よ粧ひかざりて。その〳〵綾羅の袖ゑ飜し。身の軽きことい蝶燕よもおとれらを。次郎左衛門ゞ詰居たる座敷ゑ輪ゑ組して舞環つ。絲竹の調ハそゝろハしくも耳ゑ悅バしめ。戲場の飾ハ花やぎて目もあやゑ。大内介殿いいくれたぼしけん。戲樂を半よ息させて。次郎左衛門を御坐の間よりさせらる。大内介殿いかゝ〳〵次郎左衛門とやらん。何奴ゑまを。予ゞ猛威を冒して異見とせんを不敵もの。いゝゑる相貌ふるよやと見きはしくれらゑて。戲児ハ戲服のまゝふて。殿の御側よ。稲麻のごとくかしぐきけるゞ。皆いひあいせるゞごとく。名ふゝしし。次郎左衛門ゞ。手姿ゑ見んとてを一とゝぞてゝるぬ。やとら駒澤次郎左衛門。膝行ふて。御眼前よまゝていで。敷居一つゑ隔て。額をつゝてうち畏ゝつ。内執事湯浅勘兵衛。奏者として。駒澤ゝ庵ゞ躬次郎左衛門と稟あぐ。ものとき殿ハ夥の女ども。ともよ。瞳をさだりて商ハせたまふよ。ゝの次郎左衛門生を得て。容貌美麗よ。氣宇軒昂見えて。その人品のたをやゑたるふ。ゝよき心を志ひてくハへたをバ。ふよたけの心地して。ゝをゞふをるべくもあらず。加旃ずその拳動の滿

作者曰ふの時次郎左エ門ら打扮と詳らかにいんわいとくだしくちろべそのうへ衣裳のあのと髪かたちの風しふものゝ時代ふうを流行あり。その〳〵ちがいといとじとおり風俗いまの人気ふあいぶうしむ人もあるべん。

洒れるいさらふて。今日の拜謁よ打扮ぬる。長上下の着やう。小袖の染色といひ。きたてざものの通れる。髪かたちの今様よいきぢう禁ゐて。何処よ一點の醜態ふし。かくきび殿をくどめ。あるかぎりの女中とち。きばし春戀て。肚裏よ十分の愛慕とさへ生じける。さきども殿ハ早追たてんゝおばす。御氣色れるよ。中ふも專房の婦人そと殿の御袖をひきて。今をこしちう召させたまへと。さゝやけば。殿もまと腟と。御覧あるべき。まゝんきさざろおもきび。次郎左衛門。ちこ。ちとと。尻声高く呼せたまゝ。次郎左衛門。さゝゝ怖るいろおく。やゝけきんで頭を擧きび。あたまい銀燭點し羅ねて白日のごとし。女中がさいきさまよ。御盃ゝをたてまつるい。殿よも次郎左衛門ぶ。進退の閑雅たるとおろ。れのづから御心ふかるい。御顔でせやゝやいらげて。御機嫌うるハしく。やとら大觥ゝてちしあげらを。そのまゝ。次郎左衛門よらぐさをける。次郎左衛門いやゝきくこれをいゝきぶゝ〳〵と一盃つがせ。たゞ一息よ乾乾浄〻と飲ほしけをい。女中たちハきをと見て。こをきらども微笑ぬ。殿ハきのあゝさまふいゝ興ぜさせたゝ。ひ次郎見事。おさやう。と仰すぞ。次郎左衛門。ハット應。まさしも了髪ども一盃もらせ。ゝ一息よ飲かしける。女中達いどよをあひてざめく。殿ハかさねて次郎左衛門。汝い筑紫の産るよし。さあるよや。次郎左衛門かしこまを。正是上

うらとこをおりまを金五郎に。あのあう夜ち風ふく寒すも熟づこえんで。ハはどしもしとうをとう唄まつ。ろはどかれハ。ものたハきゝてあくをらやつぶりづこえきとぶらはあうれしてと飛ん今の目ちつとどあ手れ見ん。

意のおもしろく。郷貫い肥後の菊地よりて侍ふ。仔細ありて國を去。只今い伯父了菴ぢ家督ゑ下しおうま。不思議よも君臣の因ひふし奉ふ。感佩造化よれと。聞えあぐまび大内殿るるぞ汝い儒者の孫児。さざらて頭巾氣るるものるらんとたもひしぢ。今日の打份とぬいぢ風流たふ。折ふしい遊里へも往つらんる。次郎左衛門うけたまいふ。いらふも御意のおもしく。在府のほもきくふ。伴よさそいま。深川の妓院よまうふれひしぢ。れなよ喜瀬川と申処い日本一の花街よ侍ふ。那方ふる。洛陽店の夜珠とゝ女よ。馴染とかさねさらひて。おの夜服もその夜珠ぢ。といひさゝ。又佶とふて俛けば。介殿笑顔と咄いせとまひ。次郎左衛門。くろーーからぬ。そのあとまうせ。ととさて面ゑ上よ。その夜珠とやらぢ何と志たるぞ。次郎左衛門まをゝ慨慟よ双手ゑ突。小臣らの夜珠と始て一坐仕つるし。時。かをぢ申てべるふい。郎いい山口の御藩士ねるよ。郎の御主大内介様い。鎌倉一の風流容と稱えたまゝ。その御内よてあふねぢら。ふの打份い何ごとぞ。奴よ任せたまへと。頼母ーくまうをふ從せ。よろづかをぢ計ひふねふ。今日の夜服もうをぢ截縫ていひきさてゝも喜瀬川の遊君い。はねゝ深切よ情ありのふいとい。いとはふかよ悠揚けて。ぢゝ感服たる面もちねふ。女中ちい袖打掩ひて。笑顔ゑかくせば。大内殿肩を聳せ。御声てげゝく。汝

攝州信ごちて喜瀬川でうをと日本一と稱賛とそ。旁痛きたる敵也。汝はや大磯の景氣い見たるか。次郎左衛門面目なきるいまぞ大磯い。一覽仕らずいへども。およそ女の情のふるきたいく。その所の繁花ゐるさいと。世ふまさ類あるまじく。小磯はじめさの地よ下を駭き入いと。敵面はくをて教小行る。大関谷殿きのびあへず。啊くと笑ハせたまひ。汝ハ田舍よを下をて。やうやく昨日今日。いまぞ大磯の大廓ゑ見ぬものら。さつも道理。もし見せたらバ何とういをん。寝る語もあらじ。いざさらば。今よりらしを是推ゑを見とやくと。近臣等よ吟味たまへバ。昵近の人きいそがハしく供支度をゐせう。その

もく。御庭さきゐる水門ゑひらうせ。美女洗くせし御座船よ召を。次郎左衛門ゑ左右よかしぼうせて。直よ大磯へといそゞせたまへ。おくてとや千鳥ゞ崎を後よふし三叉ゑ斜よ見ふがしにまへ。その絶景ゑはうをゐし。殿よハ次郎左衛門鎌倉ゝじゝしられバ。案内ともきらじと。御機嫌のあまを。さの舟行の雄手。雌手ふる。名勝どもをおちもゐく指點していきうせたまへ。次郎左衛門あきハ二州橋とて。納京よいよきとろぞ。其処ハ首尾の松。東橋といふぞ。向ふよ見るゐるゞ向嶋ふるぞ。河西太郎。待乳山。関屋の里。浅茅ゞ原。鵲の森。五百崎。牛の御前。あをゐる隄よ。鳥居の半

よゝ上あらいをたるい。見巡の稲荷。来方よ駒形堂のゐ
をれしへ遺せゝ。這方の塔ゑ見よ。あをきを名高ゑ淺草
寺ゑ。そてゐの駒形よて。たもひ出しつ。

君いいま駒形わとうにぞさ

ゐい大磯の遊君。奥州ゑ。嫖客ゑ慕ひて。口號たゝ句ゐう。
傾城といゝものいゝげよ優しきものよあらぞやし。ゑと飽ず
しも。長くとものゑたらひたまゝわどゑ。早御船もはきゝ
たゐふぞ。殿い次郎左衛門と從ゑへ。三谷渠よゝ上陸せ
たまひ。土手八丁ゑ歩行たまゝ。交加四手の声い正し
く。歸雁のゐさはるくゝとあやまたをゝさゝしゝて衣
紋坂をゑえ。見うへゝの柳ゑもとよゝ。そや大門口ふ

作者曰在下いまゝ大都の名勝を一覧せんい。唯人間に任て記。極てその次紋の杜撰れらんゐことをおそる。看官幸よ海涵たまひね。

入たまゝ。次郎左衛門母胎を出てよゝ。はゝゝかくる
仙境よいさゝしゐ。且驚き且呆れて。肝はぶをたる
形容ゑゝ。七座の大院い。世よ高くさゝへ虚と實の仲
の丁。諸ゝけ手くだの情ゑる吾嬬女郎のこゝつよゑ。
意氣地をくらぶ京町や。今宵い誰と伏見町新町
角町ゐぐゐもけば。水戸屋の燈籠ゝるゐ灰ゑ也。誰
や行燈うげあゐく。横町の小茶屋よい。江戸素撥の声
かしゐまし。ゑのごゐ稜晕花魁よい。舞鶴樓の頂山
舞鶴。三浦樓の高尾い。清客よも名ゑゑらをつ。その
ゐゐ。角の玉屋の薄雲るんと。呼出しの揺錢樹。ゑとと
ゑらぞ。ゑを等の姉妓ゑち。支那の和朝の綾錦を身

ふ纏ひ。小裙ういとをて。新艘妓雛とひきつれ。己
ゞ記紋の大提燈を前ゑ點させ。八文字を踏て。金蓮
式をくむ。おもよめでまど〳〵、嫖客ハ。白〳〵さきとふさだ
て。道もさをあへど。次郎左衛門ハおぞらく殿ゑをぐを
て。とある檣子ふとちより。さゝ覗ハ。花のおとを美人満
満て。蘭房のかさゝ

「ゑれをやきくるま井の。ちぐるゝ〳〵とゝのあさ、
おぞのまくれるをだをがを。

こ一関の河東曲を唱たるハ。おちず何等の人ゑるふやそ
の声妙ゑいとゞづらし。大内介殿ハもとより。おん潛行ふ
在ませバ。次郎左衛門と。近従少々らし見せらを大磯
の仙窟とゑぐりゑく。ゆをまいらせらを。やがてまた。御宿
房ゑる。松菜屋へ入せたまふ。もとゑをおの院子ハ。す
ぐをて繁昌せし。由へ。いち早く簾子ゑろゝあをて。
店のさまいとをきめやうゑを。殿の御愛妓瀬川とゑふハ。
いまゞ私下の世話の須ゑを賢氣ゑる粉頭ゑて。
生を得たる國色ハ。一咲百媚の麗姫ゑを。瀬川ハと
くゑを待まらゝけ。妹妓ハさらゑを。夥の藝者ども
洞房ゑ集へて唱ハせ舞せ。百般趣きゑる遊ども
ゝ。大内殿を頴待たてまゆをぬ。そのとゑろのさまハ。
伽南の柱ゑ。水沈香の床縁ゑを。上頭ふハ明の仇英が
密糸せし。一幅の金谷園の圖をかけつ。玉の瓶子ふハ名も

志らぬ珍花以挿ミ。火鼠の皮子安の貝ことゝはけれ。琴棋書畫の調度。あるハ和歌の書巻とし以、朋さかざまてうづだうく。茶香の具ハ七寶以ちりばめたる。盃盤の類ハ。總てその時代の高萌描緑深青磁器も。おほくハ應天府交趾の産よあらざるハし。さてまさに麒麟の膳天鵝の肉おそ見えたらね。山海の珍味以盡し。美酒ハ新豊よも優つべし。ことさら余碧の屏風ハ。燈燭ふ輝煌あひて見るふまじもく。ゆゝしく喜見城の樂も。ふきよハ過しと見えふけ。さしもの次郎左衛門。ふの大繁華大繁富以着るよ。も。只あきをよあきをて。志ばらく語ふし。殿ハふの動靜以御覽し。

次郎左衛門いゝよ喜瀬川とハいづをゝ勝をる。次郎左衛門ひを伏して忍を入。前よハ小臣眼界狹小しと。ことゝ日の本よ。かゝる極樂國のあるふと以志らず。喜瀬川のゝを遊處の最上かをとゝろえ誤まち過當のふとを禀あけ。ゆ悔ハよびがさくいと。ふゝく慚愧していと面目没風情ふを。殿ハ渠ゞ徹底感服せし体ふるを。ふのたびゝを渠ゞといひふせたをと。ふよふき御満悦とぞ。見えさせたまふ。さをとも殿の御心よハ。次郎左衛門志ゝく杯あるものかをどもいまゞ烟花の情曲ふとハゝうをゝるべゝ。わざせしゞ。酒酣るよをて。次郎左衛門坐配をふして興以添ろふと。不文不武有趣出奇。間とあハせぬふゝ

のうからず。その性しと温柔ふるふ。吹彈歌舞の雜藝といへども。一個として精熟せざるふし。正まさに天のあたへる才子といふべし。さるほどうて殿ハさらねて。瀬川をもとめ。堅よあるかざるい。二ふき風流士かたとて。ふうくわで暴ぬ。次郎左衛門かくまで殿の御心よかるひしかへ。いつとなく御側去らずといふたにける。まく烟花のものどもを一日としてたしひ出さぬさとなく。殿大磯へ入らせたまへ時。自然次郎左衛門御供せぬふたい。藝者ともまで。くるとぞれつうしがり。挙て殿ようちむかひ。相公次郎さんいへ。とうがひいとかん。かくて次郎左衛門ハ。遂よ日の出の出頭とる。殿よも今ハ次郎左衛門ねくていとおばすなどの寵遇ふるふぞ。近従の儔ふらくふをを猜え。いろふもして。御側ふ遠ざけんと。多方計較をねして間搔といへども。古今獨歩の人傑とよばるる次郎左衛門。その動るとおろさらふ一点の破綻かく。つねよ殿のおばすおとハおろさいまど御意ふきうちふさとなるなく癢きをとろふ。手のそぐくやうよ物しけるまた花柳へ嫖蝶たまへ時ハ。次郎左衛門奇異不思儀よ新しく趣向ふもひつき。種〻様〻と堅ともちけるふぞ。ねまふる百千の幇閑拳頭と集合ても。たゞ一個の次郎左衛門が風韻よれまぶさいとねしさをば大内介殿ハ。霎時も御側

ばくふしたまいず。やがて一の侍臣とおぼしき。

十四　文

一夕大内介殿い松菜樓まて。大燕のあそびと催され宴と
くのち。花魁瀬川う洞房へいらせたまひ。次郎左衛門ふ命
ぜらと。渠ゞ手ほけたる新飜の手曳と一張彈させて
瀬川ゞ膝と枕ま。とろ〳〵と御聞寐入あらまな。ゐの時
次郎左衛門。瀬川ま對ひ殿まいうまく睡せたまふ。
瀬川うち点頭ほく。ふいゞ〳〵手ふあて御臭息とう
もゞひ。いとよくゐまづまらせたまへとふ。次郎左衛門
い三絃子ふさしゐき。何うはいまらず一通の文ゐく物を
懷まとりいだし。ゐきふ瀬川ま手遞典をきば

瀬川ハふつたまとちひて。ゐを見ふたなぐきけると。近從
頭岩代瀑布太。隔房まとゐの擧動ふ見ほけしうば。
明の日竊うま殿へさやき。駒澤瀬川と密通せしに
ぎへい。その縁故ちゝ〳〵ほとまと。言上せしうば。殿もほと
ほど不審ゐばし。いうさまゐもひあいせしふともあるぞ。
手那里ま臻るおとま。次郎左衛門ゐらしほきざる時ハ。
花魁ども極て叮嚀ま たづね問ま。仔細こそあらめ。
汝まづあのおとをかくし。かれらずしも色まあらハす
おとほうきとふうくいましめとうきける。さて一夜
例のおとく。次郎左衛門ま。一張彈させて。瀬川ゞ膝
ふふ枕とし。御鼾睚雷のおとく。寐たる狀して覘ゞひ

たまへ。かくとい夢よも志らずして。瀬川ハ殿の寝息を
かうがへ。袖より封ぜし文とうで。次郎左衛門を見て。
媚たる文を。およびざしよさしいさせバ。次郎左衛門も
まさ。懐裏さがして文とり出し。互ひ目をくらうハす。
登時殿ハ。瀬川が文と取んとさしいだせしその繊手を
志つかと捉せらるを。越たまひて。やとを一不義
もの見付さ。とさけばせたまふ御声の下。かねて手配
あるしよや。近従どもどやく〳〵と躍出。次郎左衛門
弑おつとるまく。次郎左衛門ハ手をやく。丈と燭よさ
しつくるバ。そのまくひつと燃たちけり。上意とおも
かけ左右より捕ふかくるを弑。陽炎稲妻。神出鬼没の活

伎よ。殿ハ忿の御声をるどく。次郎左衛門手對をる
うとおもうるあるバ。次郎左衛門ハつとうづくまり。全く
もつて手對おどくハ勿体なし。小臣不義の覺る弑故。
申もけせんそのためと。いひたくうしろふ手弑まハし。
ミづから囚のかとち弑るせバ。人々をるあひ攔止う。
瀬川ハよくと泣たをつ。殿ハ御眉逆だち。御眼
〳〵志く。誰佩刀を拿来ると。息まき喘きて近従を
喝し。燭臺をちうづけさせ。奪さらをし文おしひらた。
をらくと覧おがしたまへバ。いとも優しき水莖から
で。コハいかふ。龍篆鳳章真名の文字。一丁一畫讀下ら
ぬ。海の外風の唐山文章ハ。さしもの殿も當惑あ

ま。呆きてさばし語おく。顧をバ夥の人の前。予大國と治る身のおきしをの文をさへ誦得ざりしと。誚る。世の人口こゝを汚とし。けまとおぼえず御顔殷めらきしゞ。さいあを。またいろはる隠語とふし。密事ゑ通ぜしもはゝらをぞとふを疑念の解たまいで。幸とあるあゝ識者ゑ召。いそぎ讀しめたまひける。御側儒者安積潤藏仰を畏て。文をとりあげて讀閲をよ。をねいちおを。繪の島ふめそぶ道の記よて。その絶景のかもむゑ書ゆらねたるのをふして。別よ何たる仔細ふし。まさ焼残の文を見るふ。その篇全ろらねども。飛鳥山よて花ゑ看の詩るを。くゞめの文よい。次郎左衛門が添削とおぼしく。處くゝ朱字の書いをあざやろはるを。おのとき瀬川涙ゑぬぐひてうちかしをまゝ。次郎ぬしゝかいざを。いさくかも漫行しきおとはけをバ。科のあるべきやうもふし。さいつぶろよを。おの大磯よ。漢文をかき詩ゑたくることゝ流行をべるよ。かくるおとゝは。殿の好ませたまハぬとおを。妾とはじゝ姉妹ゝもれべておのをさびゑふんものしさむらふ。次郎ぬしゝハ。世よまをれる博士をを。鎌倉武士の口實よ申侍ろ。そをおへおの大磯中の妓とも。次郎主の門弟とるらぬものもれく。をのゝ詩つくを文を書て。その草稿どもをバ。次郎ぬしへたのをて。雌黄とう

け侍ぞき。妾もけさふけまど文かくこゝを好こべぞ。
殿よハかくしまいらせて。文かく道をたどゝしもの
から。御目ゆ志のびてふうせしぞや。御恩ふうきぐ君
の御機嫌もかしこゝ侍をバ。ふのことゝかゝい聞え
あげまゝとれもひつをど。不意今不義ともせし
かと御不審を蒙ふぞ。そのうへ苟ふも師たる人よ悪
名とけけんふとのかゝしさふ。かく明々的よ票しお
ぐるゝふをと。涙とともふかゝとける。岩代瀑布太頭
とゝのちう。やよ瀬川どの。さいををても一應よくくも
うけくゞとし。得て花柳よいかいる偽情ハあるふら
ひ。まさう發覺時の逃道よかく陳奪輸の騙局とる。

をぞかへらきしゝとおばえたう。いでさらバ實否を紀さ
でおくべをうと。れとけれくも。瀬川ゞ調度手筥の類ひ
底ゝはらつてのこらずうちあけ。あぞかぐうの文どもを一々
あらとゝ査ををゝど。させる濫行ぶとの。文とてい一通も見
えバふを。濆文の草稿のゝ疊そとし堆だゞし。儒者
潤藏かゝくしよぞ讀見をども。總て鑢倉の名勝を
咏せしものゝ。さらぞハまゝと月をゝで花ゆ惜ゝる風
流詞ふをバ。瀑布太も今ハ呆きゝへぞ。佛頂面して
ひゝへしいゝと手もちれくく見えふける。ふの間よ近從
のものども。手分して院くの諸姉妹よ。ふのことを聞あ
いせけるよ。瀬川ゝ言葉よけをたがハず。さをがよ大磯

八代目

は大都の花柳ふまが大小名さへいらせたまへいと堅やからぎたる和歌のこゝろばらでもろこし人のもてあそぶてふ詩文章のこゝろいついまゝ習ひぞ来て姉妹ともゝ駒澤よりきて學びしはあきらかまことぞ世の諺に惡にはよけきい善ふもはよしといふごとく大内介殿はいまゞ淫天の悪事行ひたまいねどひとをら酒色に荒をたまふ御癖あれば也御氣もいとあらくあく朝政おこたり罪なきを思ひ人望をむけとる御ふるまひのをおほつましが。またび瀬川が次郎左衛門と。とまかはせし文を御覧ぜるに。絶て艶簡はいあらずして。ことごく實明なる

漢文なるまゝを。一字としても讀下したゝふことあるさへらまで。剩その夜他門よりまゝ入こゝたる。稠人に覩き見られ大きやうなる恥辱なくまひ。いく面目没にぼせしよりまゝ。たちまち一念発起まゝ予いやゝも大國なる領し。鎮西の節制と蒙をふがら。今まで文道をまらざまゝしは。家の恥。身のこゝぢ。たとひ隅田川一盃の水なる汲盡してあらふとも。濁をゝ面は清がこし。とひさしの昨日の非を悔たまひ。その夜いそぎ御舘に還らせたまひ。詰且齋戒沐浴して。礼服ふあらたゝらを。駿澤次郎左衛門紀春雄を御前に召を。とまゝく席を進まゝ汝予がためをたもひ。まきまで

幾十の内忠を盡せしこと滿足よおもふぞ。汝ハ家譜
ハをども。予ゞたゞの守護神なり。今日より始て
汝を師とし學問を勵むべし。よく〳〵指南ふ〳〵れ
よと厚き上意ゆ蒙りける。次郎左衛門おそをいろて。
頭を席ふうちつけ。おはえを涙とらく〳〵とこぼし。
物負からぬ小臣ゝ寸勞ゆ賞せらる。君さゞう善
行よをくませたまゝ。上ハ朝廷祖宗の御為下ハ臣
民御仁澤ゆ被ふるんこと。悅この上や侍るべき。
と慶賀を叙てまゝ人出ぬ。そをよりて大内介殿ハ駒
澤次郎左衛門を侍講とさせ。且暮たゞ學問ゆ勵ませ
たまふよりて聰明比なく。一ゆ聞て十ゆ知らせ
たまふよりて。駒澤ハ浩溥きる。聖經賢傳の内より。今
日の經濟ゆ。用とつべき。樞要の語のをとゑらびて。捷徑ふ
導びき講し聞まゐらせしゝば。ネど〳〵怠延ゞごとく。
御上達あらせらる。たのづゝら心と正とを。身と脩られ
て。幕府ゆ仕まして御勢いさゝゝも懈たまいず。專ら
仁政よゝろゝ政ゆ委ね。軍民を憫をたまひしほどゆ上
の御きこへよろしく。德望遠近よかくをれく。げふ當世
の賢君なりと。仰ゞをさせたまひしき。おをきゝ〳〵れから。
全く。駒澤ゞ方すよりて出て。かく名君ゆ仕たてあげ
ゆへるをゝし。前ゆ駒澤ゞ智略よて。大磯ゆ漢文かく
おこゝゆやらせし。そをよ費用たる金子どもハ總て

當家の忠臣冷泉帶刀ら計よて雜へ出せしとゝ。
花街殿一の。情俠とよゞゝ瀬川と托ゝて。非實と不
義ある擧動よとゝ。漢文をとゝかはせしが。必竟
ゝまとゝて。通明ふる介殿ゝ。諷諫ふせしゝ辛勞ども
ゝ殿後来くいしく聞召。駒澤が已を屈して。主のたゝよ
かくまで心をいやし。剩ゝ寛の汚名ゝさへいとゝ。
遂よ得がたき。勲蹟とゝかせしは。比類ふき精忠ふゝと
御感のゝまゝを〳〵重く用ひらゝて。やゝて御擢擧
ゝ。執權の格よ加へさせらゝ。もつゝら政事を委たゝ。
さてゝ遊君瀬川は。いやしゝ一夜妻ゝとゝいへゝと。
川竹のうを身ゝ似氣ふく。よくも駒澤が忠語を諾ひ。
已が真情のかゝりをゝたくし。命をゝさへゝうゝず。已ゝ刀下の
死地よ入ゝゝながら。果して駒澤もろともよ諷諫とゝし。
課せしは。世よ稀ゝる義婦といゝべし。殿よもゝのゝと
ゝふゝく賞せらゝ。若干の金子ゝもて。ゝが身價と
償ゝはせたまひ。をゝはち御偏房と用ゝたまひけゝ。
德の流行をゝゝと置郵よして。命を傳ゝよゝも速
ゝとゝや駒澤次郎左衛門は天賦し博學多才小些も
誇らず緊く篤厚の君子ふゝども。佛家のいはゝる方
便とやらん。兵家ゝいへゝる智略の類よて。人意の表ゝる
奇策を出し。さしも手硬き大猛烈の大内介殿をさ
らゝへして。忽地大賢明の人君とゝかさしゝ。國家を奉

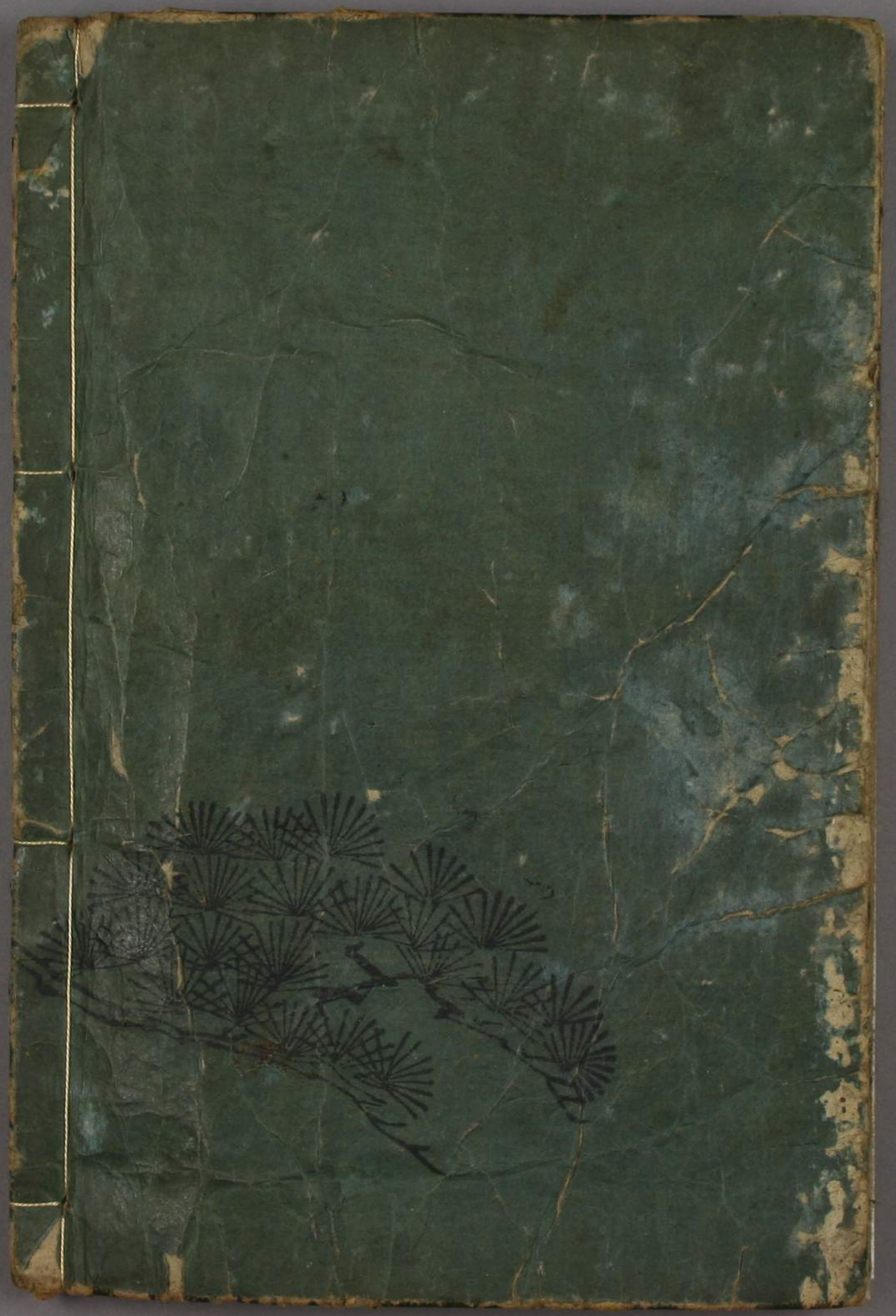
の安きを置しハ、前代未聞の名臣なると、在鎌倉の士太夫ハ、おのゝころもつゞらを沙汰して、駒澤が智術徳行とを稱賛ふける。あるゞ中に駒澤いまゞ妻なしと聞て、女子もちたらんほどのものハ、乞聟なせんと、手蔓をもとめて、縁談といひ入る人數かぎりなし。さまゞのの駒澤ハ、初宮城阿藤次郎とて、いまゞ浪人にて在し時、秋月弓之助が娘深雪といふものゝ、二世かけて鸞匹の約束をなせしもへ、信玄守ことまゞ金石のごとくなれば、さるかに歴くの大門戸よりて、姻姫と請もとめらるゝといへども、おきを一槩に推辞をなしてとゝあへざりけるを、おきふりて、たまさかふハ駒澤氏いさしも徳望人にあまゞ、内心ハ色好にて、ちらくをしふべて縁談ないゐまゞふやゝあやしむものもあるき、まさハ智量ふ人ふをばいかゞなる望らあるて、ちらもらるゝ那ら人し、結句興ふるくおもふものもよはかるを、しもろを、秋月弓之助ハ、主君太宰少貳殿の使節とおね、大番に代して、ふのとを鎌倉小下に、桐が谷なる少貳殿の第ふあるて、駒澤なるものハ、當時無双の豪傑ふるとほさへ聞紹介ともとらて、一面識となるをしがよをくその人品を羨かの家に親しく交加人と央、兄が獨娘深雪と呼るすものを、駒澤どのゝ、其幕の妻に具へ、晋秦の好をむをばと媒妁の人として、叮嚀ないてしむをば、媒妁の人ハ、ふまま

で。御直參の歴々方より縁談仰入らるゝ。駒澤一
栗に固辭たまはゞ。とても此縁なくまゝきよし成
いひ聞せども。秋月またゝを成可ぞ。ゼひとも曲て云
入見らまよ。たとひ足下の勞といたづらふるすとも。これ
拙者が生涯の心やまふまはゞあるがちふたのむふぞ。殊
妁人も今い止ことを得をして。あだことゝ成ちんとハね
もへど。物ハ試よいひ看んと。駒澤に遇てこの事を告よ
けまば。世よい業の外なるみともあるものゝ。此次郎左
衛門いまゞ阿蘇次郎たゞし時宇治よて春戀たる娘の
名を深雪とハ記えしらず。その父の名をもらざるしよ
はらず。明石の浦の月の夜ふしごと。舟の上よて環

會。その時とゞめて秋月弓之助が娘とゝを知得と
るふ今かく家老職も發跡たるふぞ遠ちらず山口へ下り
かば。かの人い程ちうれ筑前ふあるとしたもへば。そう成
見あはせ。婚姻ともとめんと。ゐどくその准備せし矢
先かゝしゝ。今日ゐんとらず。媒妁の人入来こう。
ちうくいひ出せしらば。慌ちゞことかぎるゝ成念
れして。大宰少貳殿の御内ゐるふとを問究。まくく
安堵て。一議よおよばず允諾けるよぞ。とまきかくま
を媒妁ハ事成をるとよろおび。足を空ゐしてゝ弓之助
ゞ宿所よ馳回。いとはこゝをらふ。ふのおもむき成告て慶
を叙ける。弓之助ハいゝぐと。殆ぶそれもひしふ。かく速よ

事ごとのひたるい。娘深雪がひそうよかたらひをしることと
どい夢よも志らねバ。全たく吾耳衆裏の福分なるべし
肚裏よ自負とさへ生じ。とをあくずれくもものして。己が
喜び表いし。あつく媒人とを賞しける。

朝顔日記巻之四 終

西區南法里江戸立花通り
貸本業 高砂善三郎

美